

# 『ようこそ、私の部屋へ』

三浦雅行

7881字

あらすじ

千佳子は洗剤・ワックスなどを製造する会社の OL で、後輩の健一と交際を始める。

健一は一人暮らしの千佳子の家に行きたがるが、千佳子は頑なに拒絶する。

実は千佳子の部屋はゴミ屋敷だった。

不信感を募らせる健一を前に、千佳子は途方に暮れるが、友人の遥香に連絡して部屋を片付け始める。

山下千佳子には秘密がある。  
誰にも言えない秘密が。

## 1 千佳子と後輩

静まり返ったフロアに千佳子がパソコンのキーボードを叩く音だけが響いている。千佳子の指は一流ピアニストのようにキーボードの上を華麗に動く。部分消灯が徹底されていて、千佳子のいるフロアの北側の一角以外はすでに暗くなっている。脇目もふらずに千佳子は資料を仕上げている。完璧主義な彼女の辞書に妥協という文字は存在しない。

千佳子は洗剤やワックスなどを製造販売するレンリン株式会社に勤めて三年目になる。まだ新人扱いされがちだが、企画開発部に配属され、毎日澁刺と仕事に励んでいる。上司や同僚にも恵まれ、やりがいを感じながら社会人生活を満喫している。

現在は新たに企画しているペット用の消臭剤の名称に知恵を絞っていた。ひねりがあって、一度聞いたら忘れられないような名前をつけたいと意気込んでいる。千佳子は斬新な発想力とセンスのよさには密かに自信を持っていた。抜群のネーミングを提案して、課長に認めてもらいたい。

八月の終わりの金曜日、千佳子は業務に追われて、気付けば夜の十時近くになっていた。華奢な体形だが体力だけは男性にだって負けない自信はある。

パソコンの液晶画面からはっと顔をあげると、10階のフロアにはすでに誰もいない。千佳子が仕事に没頭している間にみんな帰宅してしまったようだ。千佳子の周囲だけ明るいのが、フロア全体は薄暗くなっている。昼間あれだけ活気があった職場も抜け殻みたいになって幽霊たちがお喋りしていてもおかしくないように思える。

なんだ、最後の一人になっちゃったな、と千佳子がため息をついた途端、小山田健一がコンビニの袋を抱えてフロアに入ってくる。

「お疲れ様です」

健一は人懐こい笑顔を千佳子に向ける。

「もう帰ったんじゃないの？」

「いや、ちょっと気分転換に行っただけです」と健一は言う。「さあさあ、パーティータイムですよ」

健一は千佳子の隣に座って、子供みたいに瞳を輝かせて机の上に大量のお菓子を並べ始める。パイの実、コアラのマーチ、ポッキー、おにぎりせんべい、アポロチョコ、柿の種、ポテトチップスコンソメ味、ブラックサンダー、塩キャラメル、スルメ、ビッグカツ、ピザまん、からあげ串、大福、わらび餅、ジュースだって1.5リットルのボトルを何種類も買い込んでいる。

「こんなにいっぱいどうしたのよ」

「いや、ちょっとむしゃくしゃしてたつつか、ストレス解消には甘いものをたらふく食うのが一番かなと思ひまして。ほら、山下さんも好きでしょ、甘いもの」

「好きだけど」

「じゃあ、いいじゃないですか。二人でおやつパーティーにしましょうよ。あつ、もしかしてまだ仕事終わってないなら、先に手伝いましょうか」

「うん、もう仕事はいいのよ」

「だったら、ほらパーティー、パーティー」

健一はおやつを袋を片っ端から開けていく。

「全部開けたらもったいないよ。湿気ちゃうし」

「全部食べるんですよ。いまここで全部食べ終わるまで、このパーティーはお開きにしませんよ」

「冗談でしょ」

「いいから、いいから、ほら食べましょうよ」

健一は長く細く綺麗な指でポテチをつまみ口に運ぶ。

「うまい！ ほら、山下さんも遠慮なく」

「せっかくだから、いただくか」

千佳子もポテチを手に取り、豪快に口に放り込む。

「おいしいね」

「でしょ？ いや、よかった。山下さんの笑顔が見れて。ちょっと心配してたんですよ。根を詰めて仕事に熱中するのもいいけど、体を壊さないかなって」

「えっ？ もしかして、私のためにこれだけのお菓子を買ってきてくれたの」

「いや、どうかな。まあ、山下さんの笑顔が見たかっただけですよ。俺、山下さんの隠れファンだから」

「また冗談ばかり言って」

「さあさあ、パーティーは始まったばかりですよ。じゃんじゃん食べましょう」

健一は四月に採用されたばかりの新入社員で千佳子の後輩だ。長身で細身で、整った綺麗な顔立ちをしている。お調子者のように見えるが、細かい気配りもできて上司からの評価もすでに高い。

「こんなに買い込んで」と千佳子は言う。「お腹がいっぱいになって、先にリタイアしても知らないからね」

「俺、こう見えても、大食いなんですよ」

「そんなに痩せてるのに」

「そうなんす。食べても食べても太らない体質なんすよ」

「ねえ、ケンカ売ってるの」

「まさか。山下さんなんかめっちゃめっちゃスタイルいいじゃないですか。もしかして拒食症じゃないかって疑ってたんですけど」

「下手なお世辞はやめてよね」

「でもいつもお洒落だし、綺麗だし、ほんとに山下さんの彼氏がうらやましいですよ」

健一はキノコの山を驚掴みにして、一気に口に放り込む。

「彼氏なんていないよ」

「そうなんですか？ 山下さんほどの美人がもったいない」

「お世辞ばかり言うのやめてよ。本音で話しなよ、いまは業務外だし」

「じゃあ、俺の本音を言ってもいいですか。誰にもオフレコってことで」

急に真顔を見せる健一に千佳子は思わずどきりとする。

「いいよ。どうぞ」

「俺、ずっと山下さんのことが好きなんです。一目惚れですね。だから、俺が山下さんの彼氏になったらだめですか」

健一は熱っぽい瞳でじっと千佳子を見つめる。

「えっと、冗談だよ、いつもの」

本当は千佳子も気付いていた。健一がそっと千佳子を見つめていたことを。会議中にも目が合っ、慌てて視線を逸らしたこともあった。

「本音です。オフレコの」

耳を真っ赤にして健一はポテチやコアラのマーチや大福を貪り食う。千佳子も何て言えばいいかわからず、うつむいてポテチを口に運ぶ。

二人がお菓子を噛み砕く音だけがフロアに響く。

「いや、いいんです」

健一が明るい声で微笑む。

「気持ちを伝えられただけで、なんかすっきりしました。振られちゃったみたいだけど、引きずったりしませんよ。これからは仕事に没頭します。そして山下さんにあの時振るんじゃなかったって後悔させるくらいにさっさと出世してみせます」

「誰が振ったのよ」

「えっ？」

「パーティーはまだ終わってないのよ。さあ、私たちの交際が始まった記念に乾杯しようよ」

「まじっすか」

健一は目を見開いていて、思わず千佳子は笑ってしまいそうになる。

「まじっすかって、まさか冗談のつもりだったの？」

「いや、本気です。ずっと好きでした。もう夜も眠れないくらいに」

「じゃあ、私の気が変わらないうちに乾杯しよ」

「まじっすか！？ よっしゃあ！」

健一はぱっと立ち上がって、満面の笑みでコーラの1.5リットルのボトルを抱えた。ふたを開けると、なぜかコーラが勢いよく噴き出して健一の顔がびしょびしょになる。

「ははは、水に塗れてもいい男だよ」

「ありがとうございます。いや、なんか、ほんとにパーティーみたいになってきましたね。優勝が決まった時のビールかけみたいな。俺の気分は優勝したときみたいに最高ですし」

「よし、じゃあ、二人の門出に乾杯しよう」

グラスを重ねて千佳子と健一は微笑み合う。

## 2 一年後の千佳子

小雨が降っている。駅に向かおうとする健一を千佳子が押しとどめている。

「だめだって」

「なんでだよ」

「どうしてもだよ」

「だって、もう付き合って一年になるんだぜ。なんで千佳子の家に行ったらだめなんだよ」

「だから、だめだって。家はだめ」

「なんだよ。男でも匿ってるのかよ」

「何言ってるのよ。私は健ちゃんを誰よりも大事にしてるよ」

「だったら家に行ってもいいじゃんか」

「だめ、いまはだめ。タイミングを見計らってるの。そのうちにね」

「いつもそればかりじゃんか。いったいつになるんだよ」

「そのうちだよ、そのうち。ねえ、バーでお酒を飲みなおそうよ」

千佳子は渋る健一の手を引っ張って、地下にあるバーへと姿を消す。

千佳子は大学生のときから東京で一人暮らしをしているが、恋人はおろか友達さえも家に招いたことはない。

招きたくても招けない理由があるのだった。

千佳子は自他ともに認める美人だ。服装もお洒落で、気立てもいい。恋人の健一も優しくて男前で、千佳子は心から彼のことを愛している。

でもいくら愛していても健一を一人暮らしの自宅に連れ帰ることは断じてできない。

「俺さ、遊びで千佳子と付き合ってるわけじゃないよ。もうちょっと仕事が落ち着いたら、結婚してもいいかなって思ってるんだ」

バーのカウンターで健一は珍しく酔っぱらっている。

「ありがとう。私だって健ちゃんとは真剣に付き合ってるよ」

「だったらさあ、なんでなんだよ？ なんでいつも家はだめの一点張りなんだ」

「別にいいじゃない。私の家じゃなくても、ホテルでもどこでも泊まれる場所はいっぱいあるでしょ」

「俺は千佳子の家に行きたいんだよ。千佳子の部屋をこの目で見たいの」

「見なくていいよ。目の前の私だけを見て」

「もう訳が分かんねえよ」

「いいから、いいから。どうでもいいことは忘れてさ、楽しく飲もうよ」

その夜、健一は酔いつぶれてしまう。

### 3 千佳子の秘密の部屋

千佳子はひとり家に帰って、盛大にため息をつく。

「はあ、もう、どうしよう」

千佳子の部屋はゴミで埋もれている。フローリングの床は見えずに、場所によっては千佳子の背丈よりも高くゴミが積み上がっていて、ベランダにさえゴミが溢れている。ゴミ屋敷となった1DKの部屋には、すえた臭いが漂っていて無数の小蠅がたかっている。地獄のようだが、千佳子が七年も住み続けている部屋だ。

「言えないじゃん、言えないよ。振られちゃうよ」

千佳子はゴミに埋もれるようにしゃがみこみ頭を抱える。

千佳子はその端麗な容姿と明るい性格とは裏腹に、自分の部屋だけはどうしても片づけることができなかった。職場の整理整頓は率先してやっているのだから、同僚たちは千佳子のことを綺麗好きで几帳面な性格だと思っているはずだ。

自分の部屋だけが悲惨なことになってしまう。なぜこうなるのか彼女自身にもよく分からない。気付けばゴミが溢れていて、途方に暮れてしまうのだ。そのうちゴミ屋敷に慣れてしまい、きちんと整頓された自分の部屋など想像もつかなくなる。ゴミに埋もれていたほうが落ち着きさえする。ゴミの中で生きることこそ人間本来のあるべき姿じゃないかと感じることもさえない。

けれどこのままではいけないことも承知している。変わりたいと思う。健一のためにも変わりたい。でも何をどう変えればいいのか分からない。部屋中に溢れかえったゴミに埋もれて、千佳子は途方に暮れるばかりだ。

彼女をあざ笑うように小蠅が飛び交っている。

健一の希望を叶えるべく、何度かゴミ屋敷を片付けようとしたのだが、何から手をつけていいかも分からなかった。

「ほら、これが私の部屋よ」

何の説明せず健一を連れてきて、部屋を見せたらどんな反応をするだろうか。

言葉もなく啞然とするだろうか、怒り出すだろうか、泣き出すだろうか、健一の反応を何度も想像してみたけど答えが出なかった。

ただひとつ確信しているのは、健一は千佳子を軽蔑するに違いない。

綺麗好きだと思っていたのに、こんなゴミ屋敷に住んでいるなんてあんまりだ、俺はこ

んな不潔な原始人みたいな女と付き合っていたのか、と健一は千佳子にうんざりするだろう。そもそも居住空間を綺麗にするための洗剤やワックスを扱う会社に勤めているのに、自分の部屋がゴミ屋敷なんてあり得ない。理解できない。

どの面さげて出社してんだよ！

さっさと会社なんて辞めちまえ！

ゴミ溜めの中から二度と出てくるな！

健一は愛想を尽かして、千佳子を罵倒さえするかもしれない。

そんな事態を阻止すべく、決して健一を自分の家には近づけなかった。けれどももう限界だ。健一は不審がっていて、このまま家に招待しなければ破局に繋がる。けれどこのゴミ屋敷に招待しても確実に破局だ。

千佳子に残された選択肢はごく僅かしかない。

新しい部屋に引っ越して、汚くなる前の新しい部屋に健一を招待してみる。すごく魅力的なアイデアにも思えるが、このゴミ屋敷から引っ越すのも相当な労力がある。新居に引っ越すための資金もない。

千佳子は心底健一を大事に思っていて、健一なしの生活など考えられない。健一と離れたくない。

それならば……

やるしかない！

千佳子はゴミで溢れた部屋で力強く立ち上がる。

千佳子は自社ブランドの消臭スプレーを手にとって部屋中にまいてみる。小蠅たちが逃げ惑う。すぐに焼け石に水だと悟る。

抜本的な改革が必要だ。

近所のコンビニへ行き、大型のゴミ袋を買ってくる。

半透明のゴミ袋に手あたり次第、ゴミを放り込んでいく。

すぐに大型のゴミ袋は満杯になって溢れてしまう。

自分一人ではどうにもならない。

誰か助っ人が必要だ。

この部屋の惨状を人に見せたくはない。でも健一を失いたくない。背に腹は代えられない。

#### 4 遥香は笑顔で去っていく

千佳子は家族とは疎遠だった。特に母親とは犬猿の仲になっていて、ここ五年間は顔も合わせていない。母親に助っ人を頼むのは絶対に嫌だった。

千佳子は悩みに悩んで、大学時代の唯一の友達である田辺遥香に連絡をした。

「ひさしぶり、元気？」

電話してみると、遥香の明るい声が返って来た。

「あのさ、突然の電話で申し訳ないんだけど、お願いがあるんだ」

「どうしたのよ、改まって」

「絶体絶命のピンチなの。遥香しか頼める人が思い浮かばなくて」

「ちょっと、どうしたのよ」

「あのね、私の、私の部屋がね」

「部屋がどうしたの」

「私の部屋って、あの、ゴミ……」

羞恥と屈辱のあまり千佳子の瞳から涙が溢れ出す。

「ちょっと、どうしたの、千佳子、なにがあったのよ」

千佳子は何度も言葉に詰まりながら、惨状を伝えていく。

日曜日の朝、遥香が千佳子の家にやって来る。

「ほんとにひどいから、ごめんね」

「いいって。覚悟してきてるから」

「じゃあ、開けるからね」

千佳子はゴミ屋敷の扉を開けて、初めて人を招き入れた。

遥香は靴を履いたまま玄関先で立ちすくんでいる。

「ね、ひどいでしょ。恥ずかしくて死んでしまいたい」

「まあ、確かにひどいね」と遥香は言う。「大学のときも、絶対に家に入れてくれなかったもんね。こういうことだったのね」

「そうだったの。もう誰にも見せられない家だったの」

「みんな千佳子は金持ちの男と同棲してるって噂してたわ」

「違うの」と千佳子は言う。「溢れるゴミと同棲してただけなの」

「もう同棲相手と手を切る決心をしたんだね？」

「うん。健一のために、この部屋を綺麗にしたいの」

「これは大仕事だね」

「ごめんね」

「私たちだけじゃだめだね。力持ちの助っ人が必要だ」

「でも、私、こんなこと頼める知り合いいないし」

「任せなあって。あたしの彼氏、アメフトやってるからさ」

遥香はスマホを手にして、誰かに電話を入れる。

遥香の彼氏とアメフト仲間の五人が到着する。みんな筋肉の塊で、でも優しそうな顔立ちをしている。

「うお、これが噂のゴミ屋敷か」

遥香の彼氏が部屋を一目見て声をあげる。

「そうよ。そしてこれがこの部屋のご令嬢の千佳子」

遥香が千佳子を紹介してくれる。

「はじめまして。あの、ほんとすいません。こんな面倒なことお願いしてしまって、なんてお詫びしたらいいものか」

「いや、いいっす。俺たちなんかが、困ってる人の役に立てるなら、部屋の掃除ぐらいなんでもないっす」

彼氏は白い歯を見せてほほ笑む。

「さっそく片づけていきましょう。日が暮れる前に終わらせたいわね」

遥香は白いマスクを全員に配り、てきぱきと指示を出していく。彼氏やアメフト仲間は遥香の指示に従い、積み上げられたゴミを片っ端から片づけていく。

千佳子も未開のジャングルを開拓するかのように、ゴミの山と格闘を始める。

「さあさあ、もう床に転がってるものは何でもゴミよ。靴でもなんでも捨てちゃっていいからね」

彼氏がゴミの山の中から発見した赤いハイヒールを手にして首をひねっていると、遥香から凜とした声が飛ぶ。

千佳子でさえ、そんなハイヒールを履いたことがあるかどうかさえ記憶になかった。

「うおっ、キノコが生えてる」

「なんだこの巨大な虫は」

「なんでこんなところに天狗のお面が」

「マリモかと思ったらミカンだった」

アメフト仲間から歓声にも似た悲鳴があがる。

「大の男がいちいちびっくりしない」と遥香から厳しい声が飛ぶ。「さっさと片づける。いい、あなたたちは片づけるマシーンなの。人間じゃなくて機械。この部屋を片付けることだけに意識を集中させて」

「イエッサー」

アメフト仲間たちは素直に返事をして、黙々と手を動かしゴミを処分していく。

短い昼食休憩を覗いて、休むことなく掃除を続ける。誰もが汗だくになっている。

玄関にゴミ袋が何袋も積み上げられていく。

ようやく床が見えてきた。

レンタカーの軽トラでゴミ袋の山が運び出されていく。

千佳子は雑巾と自社ブランドの洗剤で床のフローリングを磨く。

「いままでごめんね」

千佳子はフローリングに謝りながら床を磨く。雑巾はすぐに真っ黒になる。

遥香やアメフト仲間たちも加わり、床を磨き上げる。

千佳子の部屋は見違えるように綺麗になった。

夕陽が窓から差し込んで、まるでモデルルームのように輝いている。

「ありがとう、ほんとうにありがとう」

千佳子は感激のあまり遥香に抱きつく。

「よかったよ。最初は無理かと思ったけど、やればできるもんだね」

「ねえ、もうなんてお礼をしたらいいかわからないけど、まずは夕食をご馳走させて。もうなんでも好きなもの食べていいから」

「お言葉に甘えたいことだけど、疲れたしみんな予定もあるから、これで失礼するわ。それより、はやく千佳子の彼を呼んで安心させてあげなよ」

「そんじゃ、お疲れ一っす」

遥香と彼氏とアメフト仲間たちが一斉に引き上げていく。

「そんな、ちょっと待つてよ。お金払うよ。業者に頼んだら、きっと何十万円もかかると思うし」

千佳子が財布を取り出し、遥香たちを引き留めようとする。

「野暮なこと言わないで」

遥香は厳しい目で千佳子を睨む。

「あたしは友達だから千佳子を助けただけだよ。お金なんかいらぬ。その代わり、もし私がピンチになったら、そのときは千佳子もよろしくね」

「うん、約束する。いつでも駆けつけるから」

「そんじゃ、彼氏によろしくね。うまくいくといいね。これからはたまに掃除もしなきゃだめだよ」

遥香は笑顔でひらひらと手を振って、軽トラに乗って帰っていく。

## 5 ようこそ、わたしの部屋へ

千佳子はうれしくて、綺麗になった部屋に見とれている。

ゴミ屋敷だったことがもはや信じられない。

たった一日で見違えるように綺麗になるなんて。

愛しさが込み上げて、フローリングを指で撫でてみる。

さすが我が社の洗剤だ、こんなに汚れが落ちるなんて魔法みたいだ、と千佳子は嬉しくなる。

千佳子はまるで猫を撫でるかのように、何時間も床を愛しそうに撫で続ける。

翌週の日曜日、千佳子は朝から料理を張り切っている。

料理は苦手だが料理本を睨みながら、健一のために心を込めてつくっている。

今夜、健一が部屋にやって来る。  
健一は千佳子の部屋を見て、なんて言うだろうか。  
素敵な部屋だねって笑ってくれるだろうか。  
千佳子はいまからわくわくしている。  
健一の背中に飛びついて、子猫のように甘えてみたい。  
健一は千佳子にプロポーズしてくれるだろうか。  
永遠の愛を誓ってくれるだろうか。  
千佳子はいまにやにやしながらキャベツを刻んでいく。

もう二度とこの部屋は汚さない。  
もう二度とゴミ屋敷にするもんか。  
ここは私たちの愛の巣だ。  
私たちはこの部屋でのんびりと愛を語り合おう。  
「ようこそ、私の部屋へ」  
千佳子とはびきりの笑顔で、最愛の人を招き入れるつもりだ。  
(了)